広島工業大学紀要教育編
第10巻（2011）pp.61-64
エ　ッ　セ　イ

『春の戴冠』と「蝉と蟻」

酒見　紀成 *

（平成22年８月10日受付）

Haru no Taikan and “The Cicada and the Ants”

Kisei SAKEMI

(Received Aug. 10, 2010)

辻邦生の『春の戴冠』はイタリアの初期ルネサンスを代表する画家サンドロ・ボッティチェルリを扱った作品である。語り手はサンドロの幼なじみで，ギリシア語教師のフェデリコ。当時のフィレンツェはメディチ家抜きには語れない。“祖国の父”とまで言われたコジモは侍医の子であるフィチーノに語学の才能があるのを見抜き，彼に別荘を与え，プラトンを翻訳させた。コジモの孫のロレンツォも，ボッティチェルリ，リッピなどの芸術家や，フィチーノ，ポリツィアーノ，ピコ・デラ・ミランドラといった人文主義者のパトロンとして，祖父のプラトン・アカデミーを主宰した。小説ではフェデリコは，『饗宴』や『パイドロス』の註解を書いたフィチーノの弟子という設定になっている。ボッティチェルリの「春（プリマヴェーラ）」と「ヴィーナスの誕生」もこれらの知的風土の中で生まれた作品である。

1478年，パッツィ家の陰謀により，ロレンツォの弟のジュリアーノが暗殺される。事件の前，ジュリアーノの恋人と噂されたのが絶世の美女シモネッタ・カッターネオである。彼女は1475年，ロレンツォが主催した「大騎馬試合」で美の女王に選ばれ，優勝したジュリアーノに勝者の兜を手渡した。しかし，翌年，胸の病で23歳の若さで夭折。小説では彼女はフェデリコの教え子となっている。ボッティチェルリも彼女の絵を描いている。ピエロ・ディ・コジモやダ・ヴィンチも描いているが，ダ・ヴィンチのものが一番可憐である。また，「春」や「ヴィーナスの誕生」も彼女をモデルにしていると言われる。（彼女がシモネッタ・ベスプッチと呼ばれるのは，マルコ・ベスプッチと結婚していたからである。そしてこのマルコと，アメリカ大陸を「発見」したアメリゴ・ベスプッチとは遠縁にあたるらしい）。

ロレンツォは自分の子供たち，ピエロとジョヴァンニとジュリアーノにギリシア語を学ばせている。詩人のポリツィアーノもチューターの一人であった。そしてポリツィアーノやロレンツォにギリシア語を教えたのがアルギュロプーロス（Giovanni Argyropoulos）という東ローマ帝国（ビザンティン帝国）の学者である。彼の前にはクリュソロラス（Emanuel Chrysoloras）という外交官・学者がコジモからフィレンツェへ招聘されている。そして彼らが持参した本の中に『イソップ寓話集』もあった。ロレンツォは子供たちのために豪華な写本を作らせており，それが長男のピエロの蔵書に見つかっている。今，その写本はNew York Public Libraryにあり，その１ページが「バルバロイ」というウェブ・サイトにアップされている（http://web.kyoto-inet.or.jp/people/tiakio/cicada/medici.html）。

そのページは「蟻とキリギリス」ではなく，「蝉と蟻」である。同サイトには，本文のギリシア語は，Hausrath版Fable 114 [373]「蟻とクソムシ（kantharos）」の「異文２」とまったく同じ，と書いてある。早速，Ben Edwin Perry, *Aesopica*. Vol. Ⅰ（Urbana IL：1952）を注文した。これは中務哲郎訳『イソップ寓話集』（岩波文庫）の底本である。しかし，本が届く前に，“Aesopica website”（http://mythfolklore.net/aesopica/index.htm）で本文を入手することができた。そこにはギリシア語の本文だけで４つある。Perry 373: Aphthonius 1, Babrius 140, Chambry 336, Syntipas 43である。シャンブリ版には散文と韻文の両方があり，散文の方がメディチ家の『イソップ』と同じである。確かにΤέττιξ καὶ μύρμηκες（蝉と蟻たち）とあり，挿し絵にも大きな蝉がいる。『春の戴冠』のフィレンツェでも蝉が鳴いていた。日本にも蝉はいる。アテネの緯度は仙

* 広島工業大学工学部電子情報工学科

台とほぼ同じで，北緯38度。しかし，地中海沿岸を除くヨーロッパではあまりなじみが無い昆虫のようで，物語がアルプス以北に伝えられる過程で，セミがコオロギやキリギリスに換えられたらしい。日本に伝わったのはアルプス以北からの寓話である。もっとも，戦国時代にイエズス会の宣教師が持ち込んだ，「エソポのハブラス」などでは「セミ」であった。が，明治以降，英語のイソップ寓話集が数多く訳されたので，「キリギリス」となったという（花間隆氏のウェブ・サイト＜「イソップ」の世界＞参照）。

メディチ家のイソップは冒頭を欠いており，恐らくここにイソップ伝が入っていただろうと言われている。冒頭にイソップ伝を置くのは，ビザンティンの学僧マクシムス・プラヌーデス（1310年頃没）による集成の最大の特徴とされる。これはギリシア語の集成で，144話前後から成っていた。メディチ家の写本もほぼ同じで139話。このプラヌーデスの集成は，最古にして最大の散文のイソップ集成であるアウグスブルク校訂本（ミュンヒェン写本564）を構成する３系統の１つ，校訂本Ⅲである。一方，ヨーロッパ・イソップの主流をなしていたのは，10世紀頃のロムルス集と呼ばれるラテン語の集成で，これは83話から成り，その第４巻19話が「蝉と蟻」“de cicada et formica”である。ラテン語散文集成には他に２つの異本があるが（ルーフス集82話とアデマール集67話），アデマール集でも“FORMICA ET CICADA”である。

“Aesopica website”にはCaxton訳（1484年）もアップされている。同じ話は4．17.“Of the Ant and of the sygale”にあり，sygale = Fr. cigale < L. cicāda であるから，まだ「セミ」である。しかし，面白いことに，挿し絵にはコオロギとアリが描かれているのだ。上述のサイト「バルバロイ」には上田敏の幻の論文「伊曽保物語考」がアップされている。それによれば，キャクストンはSteinhowelのラテン語をJules Machaultが仏語に訳したものから重訳したという。

> 1480年Heinrich Steinh[o]welの羅甸及び独逸語の集が，近世語伊曽保物語の根元である事を発見する。時宛も印刷術発明の世であつたから，有名なる英人Caxtonは里昂〔リヨン〕のJules Machaultの仏訳を通じてシュタインヘエヴェルの原本を重訳し1484年之を刊行した。

実は，「バルバロイ」の＜インターネットで蝉を追う＞を見ると，シュタインヘーヴェルのラテン語・ドイツ語対訳本（1476/77年頃，底本はロムルス集）のドイツ語訳において，既に‘ain grill’（コオロギ）と訳され，挿し絵にもバッタかコオロギが描かれている。一方，シュタインヘーヴェルの対訳本をもとにマショーが訳し，キャクストンが参照したフランス語訳では本文は‘la sigale’のままであるが，挿し絵はコオロギ。キャクストンは原文に忠実な翻訳者だったので，挿し絵との不一致に気づきながらも仏語の“sygale”を残したのかも知れない。（英語における“sygale”の用例はここだけ。一方，“cicada”はもっと早く，14世紀末のJohn of Trevisaによる *Polychronicon* の訳が最初である）。1574年のドイツ人Hieronymus Osiusの本でも，本文には *cicada* とあるのに，挿し絵には大きなバッタが描かれている。また，同年に出版されたBernard Salomonの題にはセミとコオロギの両方が入っている（“Des Formis & de la Sigale ou Grillon”）。どうやらセミをコオロギに換えたのはシュタインヘーヴェルが最初らしい。（1350年頃，ドミニコ会士Bonerが書いたイソップ風寓話集『宝石（Edelstein）』でも，挿し絵はまだ蟻とセミである）。因みに，シュタインヘーヴェル本はドイツのウルム――アインシュタインの出生地――で出版されているが，その緯度は北緯48度，仙台より10度ほど北である。

英語の本文に「コオロギ」や「キリギリス」が登場するのはいつだろう？キャクストンの翻訳本は1484年から1676年まで12版を重ねている（Willis G. Regier）。Wynkyn de WordeやWilliam Coplandなど，彼の後継者たちは綴りを当世風にしたり，過りを訂正したりしているので，しかも，挿し絵には初版からバッタ（コオロギ）が載っていたのだから，かなり早い時期に，恐らく16世紀の中頃には“grasshopper”に換えられたのではないだろうか。*Middle English Dictionary* を見ると，*gras-hoppe* と *gras-hopere* の２つの見出し語が出ており，両語とも古くからラテン語 *cicada* のglossとして使われていたのだった。Trevisaは，バルトロメオの『事物の特性について』の翻訳において，「セミと呼ばれるバッタの仲間がいる」（147a/b　There is a maner Grashoppere Þat hatte Cicada.）と書いている。de WordeはこのTrevisaの翻訳書を1495年頃出版しているので，もし彼がキャクストン訳『イソップ』を出版していたら，*sygale* を *grashoppere* に換えたかも知れない。セミを見たことのない英国人にとって，今でもセミはバッタの一種ぐらいの認識しかないのかも知れない。手許の *A Lexicon Abridged from Liddell and Scott's Greek- English Lexicon*（1966）は τέττιξ＝a kind of grasshopper, the cicala としているのである。ネットでいろいろ調べていたら，ケンブリッジ大学モードリン学寮の最初のカタログに，本を寄贈した人の名前と共に，“an Aesop（de Worde, 1503）”が見える。しかし，これはラテン語であった。*Short-Title Catalogue of Books printed in*

Britain という本には

175. Here begynneth the book of the subtyl historyes and fables of esope whiche were tr[anslated]out of Frensshe by W[illiam]Caxton.[With the Life (of Aesop) ...]. Caxton 1484 (26 m[arch].)
176. [Another edition]. R[ichard]Pynson 1497?
168. Aesop. Esopus cum commento optimo et morali. [Partly in verse]
169. Fabule Esopi cum commento. W[ybkyn]de Worde. 1503.

という記述があり，キャクストンの英語訳は13年後に，もう一人の後継者 Richard Pynson によって再販されているのが分かる。彼も英語の標準語化に寄与したとされるので，*grashoppere* に換えたのは，Pynson が最初かも知れない。しかし，この予想も外れてしまった。彼は Caxton が使ったフランス語の sygyle/sygyll/sygall を保持していたのだ。

先のカタログ（*STC*）によれば，1600年までに英語のイソップは17冊ばかり出版されている。1551年版は Caxton 訳であるが（‘sygale’があり，前後の物語も同じ），挿し絵がなく，その代わりに‘Of the Aunt & the Sygall of Creket’と‘Creket’が入っている。1570年版でも‘Of the Aunt and the Sygal or Creket’となっている（本文は *sygall* のまま）。つまり，フランス語の *sygal* はコオロギと解されているのである。そして1585 (?) 年版でも‘Of the Ant and the Sigall or Creket’であり，本文にはまだ‘sigal’が現れる。題も本文も‘crekit’に換えられたのは1596年版においてである。1628年の J. Legat 版も1634年の J. Haviland 版も同様。そして1639年の William Barrett 訳では‘The Ant and the Grasshopper’となっていて，初めて「キリギリス」が登場する。しかし，1647年に F. R. によって印刷された版では‘Of the Ant and the Creket’に戻り，1651年に R. D. が印刷した版では‘Grashopper’だが，1658年の Owsley & Lillicrap 版では‘Creket’という風に，両語が競合する。1668年の Charles Hoole によるラテン語と英語の対訳本では‘Of the Pismire, and the Grashopper’（同年に出版された la Fontaine のフランス語の寓話詩ではまだ *cigale*「セミ」）。

1747年の Croxall 師の翻訳ではまだ long *s* が1つの *grashopper* である。19世紀以降は，Thomas Bewick (1818)，Rev. George Townsend (1867)，Ernest H. Griset (1884)，Rev. Thomas James (1888)，Joseph Jacobs (1894)，Vernon Jones (1912)，Milo Winter (1919) などすべて *grasshopper* である。ただし，一番最近の Laura Gibbs (2002) は *cricket* と訳している。一方，Penguin Books に入っている Olivia and Robert Temple 訳 (1998) はラテン借入語の *cicada* を使っている。因みに，1535年の Coverdale 訳聖書は，『伝道の書』xii. 5で，Wyclif や後の版が *locust*「いなご」と書いている所で *greshopper* を使っている。
（アメリカでセミを *locust* とも言うのは，セミを知らない初期の開拓者たちがバッタと混同したからだと言われる）。

これも「伊曽保物語考」からの受け売りだが，12世紀末に Marie de France がアングロ・ノルマン語に翻訳した“Ysopet”では“Del hulchet e de la furmie”と訳されているという。が，“hulchet”は他に在証がなく，写字生たちにも難しかったらしく，後世の人の手で“cricket”という書き込みがしてある由。もしそれが“cricket”を表す語なら，セミ→コウロギの置換はドイツ語訳よりフランス語訳の方が早かったことになる。が，Marie はイング

gras(s)hopper

1639 (William Barrett)
1651 (R. D.)
1687 (Francis Barlow)
1700 (Charles Hoole)
1747 (Rev. Samuel Croxall)

cre(c)ket

(1551)
(1570)
1596 (J. Orwin)
1628 (J. Legat)
1634 (John Haviland)
1647 (F. R.)
1658 (Owsley & Lillicrap)
1676 (S. & B. Griffin)

cicada

1998 (O. & R. Temple)

ランド王ヘンリー２世とその王妃アリエノール・ダキテーヌの宮廷のメンバーだったと推測されており，しかもMarieが翻訳に使った本は，今は存在しないが，12世紀初めに中期英語の北部方言に翻訳されたものだったという説もあるので，それが本当なら英語が一番早いことになる。しかし，これは憶測の域を出ない。

ところで，「蟻と蝉」（Perry 373）はバブリオス由来の寓話として，ペリーによって正系から外されている。バブリオス140番にあるということはすでに１世紀後半にはイソップ寓話集に加わっていたわけだが，それでも由緒正しさを問われなければならないのだろうか？実は，「蟻とクソムシ（センチコガネ）」というよく似た話があり（後１世紀前半にラテン語に韻文化したパエドルスにも，ギリシア語のバブリオスにも入っていないが），こちらが本家らしい。と言うのも，「蝉と蟻」はいきなり「冬のさなかに，蟻たちが濡れた穀物を乾かしていた」で始まるが，本家の方は「夏のさかりに，冬に備えて自分の食糧を蓄えていた」で始まり，この方が話として自然だからである。ハウスラート版でもこちらが114で，「蝉と蟻」は114 Ⅲとしてある。

『イソップ寓話集』は早くからいろいろな言語に訳されているが，それぞれ収録している話の数がまちまちである。最古にして最大のアウグスブルク校訂本に採録されていたのは231話であるが，ペリーの校訂本にはギリシア語の寓話471話とラテン語寓話254話が入っており，いかに各地の寓話や民話が入り込んでいったかが分かる。中務哲郎氏も「今となっては，どの話がイソップその人の作であるかは確認できない」と言われる。と言うのも，アイソーポス（イソップ）の生年は前610年から600年頃とかなり早く，この寓話作家について言及したヘーロドトスより約120年も前の人だからである。アリストパネースやプラトーンもイソップの寓話を読んでいたらしいが，前四世紀にはすでにイソップの名は「寓話作家の代名詞になっていたと考えられる」からである。